

片見の帯

小笠原幹夫

古くなつた器具類がお化けになるといふ伝説は、室町時代からあります。ちょうど池や沼に棲んでいる動物が年を経て霊力をもち、いわゆる主になるようなものです。だから江戸・明治の時代には、毎年、年の暮れになると、ひととは煤はらいと称して、古道具を路地に捨てたのです。年末の大掃除は、たんに衛生のためでなく、どうやら古道具の妖怪化を防ぐためであつたらしい。

室町時代に書かれた、御伽草子の一つである『付喪神記』には、この捨てられた道具たちが、まるで解雇された奉公人のように、一個所に集まって鳩首談合し、お化けになつて恩知らずな人間たちに復讐してやろうと一決するところが描かれています。鏡だとか兜だとか、太鼓だとか笛だとか、鏡だとか火鉢だとかいった古道具たちが、深夜、手足をはやして、火を燃やして、京都の町を、ぞろぞろ行列して歩くというのです。これが、いわゆる百鬼夜行というもののだそうです。

妖怪変化や鬼とまでいかなくても、この世に恨みを残し

て変死した人々や、失恋や挫折の執念深く、自分から命を絶つた人が、生前使っていた品物に靈魂がこもつて、心弱い者の目に物の怪となつて現われるというような話は、ヨーロッパにも日本にも、数限りなく伝えられています。

昭和三十年頃、神田川に架かる昌平橋より入水自殺した、講武所（神田花街）の芸妓、分松葉屋蔦奴が締めていた錦地の帯についての不思議な話が、明神下の料理屋や待合で噂となりました。それによると、蔦奴と同じ家の抱え芸者の小芳が蔦奴の気に入っていた帯を譲り受け、座敷に締めて出たが、何か蔦奴が背後にいるようで不気味な気がしたというのです。

とくに不思議なのは、この帯を衣紋竹にかけておくと、誰も触らないのにいつの間にかずるずる下り落ちて、何度かけ直しても衣紋竹にとどまることがありません。

件の帯は金糸や銀糸をつかつて織つた華やかな、そして手のコんだ上物で、蔦奴が芸妓になる前に恋人だつた大学生が贈つたもので、その男はニューギニアで戦病死したと伝えられています。

終戦後十年も経っているのに、かつての恋人への思い深く、あと追い自殺したというのは、美談ととるか、問の抜けた話と思うか、妄念妄執の晴れない人間の恐ろしさに慄えあがるか、あるいはまた、例の付喪神の仕業、すなわち身につける物にまつわる怪であつたとするか——いろいろ

な解釈ができます。

またある者が言うには、鳶奴が入水した日の朝、分松葉屋の小女がこの帯を洗ったのですが、物干し竿に掛けておいたのが、いつの間にか下に置いてあった盥のなかに浮かんでいたのです。そのときはべつに意に留めなかつたが、あとで考えると入水の前ぶれであったというのです。

しかしよく考えてみると、盥に落ちて水に浸かつた帯を、その日、縮めて出ることではできなかったはずで、その帯が身投げの前兆だったというのは、どこかピンとこないではありませんか。

また、入水したときに身につけていた、死者の持ち物を譲り受けて、客席で着用するというのもちよつと腑に落ちません。だから、小芳がお座敷で着用していた帯は、鳶奴が身を投げたときに縮めていた帯ではなかつたに違いありません。盥に落ちて水をくぐつた帯も、小芳がもらつた帯も、恋人から贈られたという、因縁のある帯ではなかつた。そんな穿鑿もできます。

噂話というものは、他愛無く、あるいは密やかに、あるいは悪意にもとづいて、日々流される、不確かな伝聞、真偽不明の報道であつて、同時に夢物語であり、夕暮れどきの風に乗つて街をつつむ、人々の願望・幻想・怨恨の寓話でもあります。

たとえばまた、講武所——神田台所町、同朋町かいわい

の花街——には次のような噂話が流れたことがあります。明神下のある芸者屋では、障子越しに、誰かが寝ているのが見えましたが、部屋にはいつてみますと、蒲団はしいてあるが、寝ている者はいない。ただ枕許に、人の骨が白木の箱にはいつて置いてあつたという怪事が報じられました。見つかつたのは、情夫に裏切られ、自分の部屋で首を縊つて死んでしまつた芸妓の骨だつたそうです。

この噂も、鳶奴の話につうじる、身につける物や寝具にまつわる怪談といえましょう。ただし、死者のお骨は、ふつう遺族に渡すか、墓におさめるのが当り前で、死者が生前使つていた部屋に放置しておくというのは、ちよつと解せません。これなども、いささか眉唾物の噂話ではなかつたでしょうか。

古くなつた品、見捨てられたものの陰気が凝ると、心弱いものには物の怪となつて現われると、『付喪神記』には書いてあります。

あわれな鳶奴ですが、男の形見の帯をしめた彼女が、帯と一緒に死んでやれと思つたのも無理のないことかもしれ